2017・2号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

41号

2017・12-2018・6

◉特集◉

元J-ホールディングス社長 伊藤利彦さん

提言 長期的視点から上越人に考えていただきたいこと

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

記憶の底に生き続けるまち

国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける

春日山城と越後府中⑤

港町と笏谷石～商品だったバラスト

歴史は「今日」への手紙

◉番外編

春日山城跡 土砂崩落から一年

記憶の底に生き続けるまち

鈴木のり子

「私の直江津」と言って、まず思い出すのは荒川（関川）河口と直江津の海岸です。生家がそこにあったからだと思います。

小学生のころの世界と言えば「ご近所」でした。新川端区にあった家から歩いて数分もかからずに海、家の裏の通り二本先には荒川が流れていました。海に向かうと諏訪区、横には片原区があり、子どもたちは、屋号で呼び合って遊んでいました。

「鉄砲サ」で、鉄砲撃ちゃ「きょべさ」でキョッキョッと、由来も知らずに囃し立てて喜んでいました。ちなみに、我が家の屋号は「太神楽（だいかぐら）」です。先祖は神楽が大好きで、神楽がやって来ると後について廻っていたので…、と聞いていますが真偽のほどは判りません。

実家の二階に洗濯干し場がありました。そこからは、沖に停泊している貨物船の石炭をピストン輸送する蒸気船がポンポンポンポンと音を立て、何艘もの木造船（はしけ）を繋いで河口から海へ向かっていく様子を見ることが出来ました。その光景は今でもはっきりと目に浮かびます。

川沿いに石炭を運ぶ引込線の駅があり、貨車が石炭を運んでいました。貨車を引っ張って行き来する蒸気機関車（ＳＬ）から出る燃えカス、コークス（石炭がら）を戦後の燃料不足を補うために大人も子どもも拾っていました。また、駅周辺には大きな倉庫が並ぶ倉庫群がありました。

川には洗い場が作られていて、野菜を洗っている隣で洗濯物をするという風景も覚えています。ですが、衛生面で問題があったという話は聞きませんでした。

河口に最も近いところに「永代橋」という木橋が架かっていて、古城地区の子どもたちが橋を渡って直江津小学校に通学していました。積雪時の通学はさぞ大変で、怖い思いをしたであろうと思います。橋は終戦の直前に兵隊さんたちによって落とされたと記憶しています。

河口付近の様子は大きく変わりました。

たび重なる水害対策のための大規模な河川改修工事が行われ、川幅が大きく拡張されたために琴平神社が移転し、人家も立ち退きました。この辺りは歴史ある大店が多かったのですが、ほとんどが立ち退きになり、残念な思いがしました。

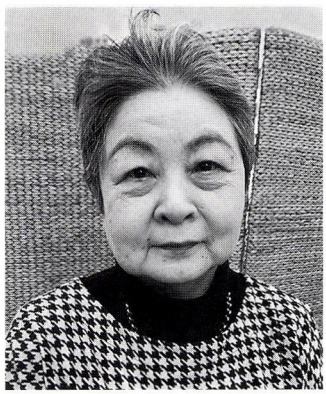
そして「諏訪区」は無くなり、「新川端区」は荒川町に、さらに今は「中央三丁目」と、地域は変わっていきました。

こどものころ、海岸の波打ち際まで距離があり、

アチチ、アチチ

と、つま先立ちで走って泳ぎに行った海岸線の様子もすっかり変わりました。テトラポッドで埋め尽くされている光景を眺めていると、あの頃のことが、夢だったかのように思われます。

直江津で生まれ育って八〇余年。若いころには、見知らぬ土地で暮らすことに憧れたこともありましたが、「直江津」の歴史と変遷を体感できたことは何よりだったと思います。



鈴木のり子さん

昭和10年、直江津町（上越市）新川端区に生まれる。82歳。

小川未明ボランティアネットワークでの朗読、上越朗読奉仕の会会員として五智老人ホームで紙芝居や物語の朗読を行うなど、お元気で活躍中です。

提言

長期的視点から上越人に考えていただきたいこと

伊藤利彦

はじめに　―上越への感謝と問題意識の変化

私は、J－ホールディングス（株）での仕事のため、平成二五年四月から、本年六月まで四年三ヶ月間ほど、春日山で暮らすことができました。本町一丁目で生まれ育ちましたが、上越での生活は、高校卒業以来、実に四九年ぶりのことです。

まことに楽しき日々でした。気候、風土、食、酒、歴史文化、ゴルフ、昼夜の行楽などなど、故郷のすべてをエンジョイしました。とりわけ、お会いした皆様全員のお人柄にふれ、たくさん感激し、たくさん勇気をいただきました。アル中ハイマーの私であっても、皆様から頂戴したご親切ご懇情は、一生忘れないほど大きなものとなりました。正直に申し上げまして、私の持ち込んだものより、皆様から私が受け取ったもののほうがはるかに大きかったというのが実感です。

ところで、上越にやってくる前には、高校（高田高校）OB会東京支部の活動を通じて、上越と接する機会が結構ありました。金融や国際関係の仕事を通じてある程度の感度を持っているつもりでしたので、上越に対して自分なりの問題意識を持っていました。

それは「上越に新幹線がやってくる。新幹線は、いい人を運んでくるが悪い人も運んでくる。悪い人たちに上越の人たちがいかに騙されないようにするか」でした。

しかし、魅力あふれる上越に暮らしてみて、その問題意識が変わってきました。「上越は住み良いまち。これからの上越人が、いかにして、増えてくる外来人を活用する立場になり、上越の歴史と伝統、文化を守っていくのか」となりました。

以下、長期的視点に立って、これからやってくるであろう変化に対応して、上越人は何を備えたらいいのか、お節介にして未熟ながらも、自分なりに思っているところを、思いきり、独断と偏見で述べてみたいと思います。



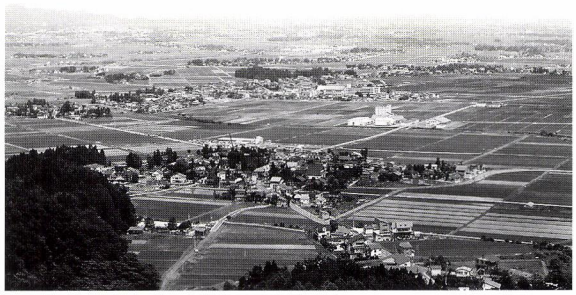
伊藤利彦さん
昭和20（1945）年生まれ／上越市本町1丁目出身／東京大学経済学部経済学科卒／昭和44年㈱三和銀行入行／三和オーストラリア社取締副社長㈱JCBトラベル代表取締役副社長
平成25～29年　公募によりJホールディングス社長に就任。プロフィールと写真は「直江の津」（33号）ロングインタビューから

本質を表すために、極論も含まれておりますので、一つの見方として参考程度にお読みいただければ幸いです。

魅力がいっぱい、住みやすいまち、上越

上越で暮らしてみて、初めて知った魅力がたくさんあります。それは生まれながらに住み着いて感じている魅力とも違うと思います。むしろ各地を土地を訪れたことのある旅行客が、気が付くことに近いのかもしれません。

まずは高田の夜桜。無意識のうちに他の地の桜と比較しています。そうすると、高田の桜は、四九年前に感じていたような豪華さや華やかさでは、他と較べて少し見劣りがします。その代り、楚々とした美しさがあります。ごく素直な美しさがぼんぼりに映えて、どこまでも広がっているのです。桜の木の一本々々ではなく、全体としての桜が美しく、その醸し出す自然の小さな美しさがたまらなくいとおしく感じられます。



板倉区の山並みから頸城平野を望む



えちごトキメキ鉄道　上越妙高駅

それから、板倉のやすらぎ荘からみた里山の風景。私のもつ故郷のイメージそのものです。懐かしく、いつまでもここにいたいというのは、私だけでなく、東京から来た私の友人夫妻の言でもあります。素晴らしい故郷を発見した思いがします。

そして、妙高から米山までの連山とそれらに囲まれる頸城平野。大きな広がりを予感させる日本海とそこに落ちていく大きな夕陽。しかし、なんといっても、上越の水と空気が本当に素晴らしい。上越妙高駅で降り、えちごトキメキ鉄道に乗り換えるとき、プラットホームでの空気は本当に新鮮で、清々しい味がします。やはり、あの大量の雪が水も空気も浄化してくれるのでしょうか。

食と酒は言うまでもなく、世界のなかでもAクラスです。百数十ヶ国を回ったことのある経験からも太鼓判を押せます。

もう一つ見逃せないのが、上越人のやさしい人柄でしょう。朝のゴミ捨ての際も必ず挨拶を交わしたり、いろいろな記念館でも親切に解説していただいたり、東京ではあまり経験しないことです。

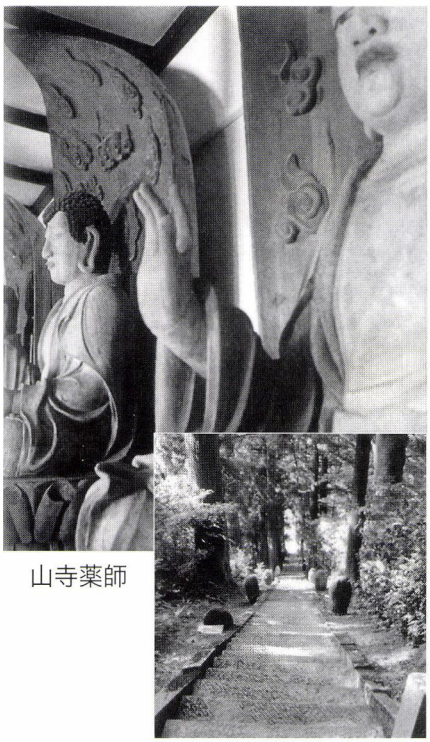
ただ、一方で、正直に申し上げるなら、私自身は、春日山城や高田城にはそれほど魅力を感じませんでした。謙信公の戦上手には関心があっても、義の心の真の意味を理解することは難しかったし、高田城についても築城物語は面白かったのですが、城そのものについては、他と比較するとさほど感激することはありませんでした。むしろ、中山間地域での人の手になるもの、たとえば、板倉の山寺薬師や人柱供養堂のほうが感銘を受けました。それに、雁木の美しさも忘れられません。

こうしてみてくると、つい他と較べてしまう私にとっては、上越では自然や食、住む人たちの人柄、理解でき

る物語を持っている歴史的遺産などに魅力を感じました。

また、生活環境についていえば、ゆったりとした住宅事情、渋滞や混雑のない広い道路、種類豊富で便利なショッピング施設、おいしいお店の数々、図書館、スポーツ・レクリエーション施設や医療施設の充実など、普通に生活をするにはなんの不自由もありませんでした。東京に住んでいた私にとって、うらやましい限りでした。

結論として言えば、私のつたない見聞でも、世界のなかで上越ほど水と空気がきれいで、食や経済、文化がある程度のレベルにあり、住みやすいところはそうざらには見当たりません。この上越を訪れる人たちもたぶん同じように感ずると思いますし、上越の魅力は人を惹きつけるに違いありません。



山寺薬師

上越の人口は減らない

さて、今後の大きな流れを見るうえで重要な問題は人口問題でしょう。いま、日本中が人口減少に悩んでいるといいます。上越も御多分に漏れず、人口減少が最大の課題の一つだと言われています。先の市長選挙においても人口減少への対策が争点のひとつであったと思います。

しかし、上越の人口は減っていくというのは本当なのでしょうか。たしかに、一二年前の平成の大合併以来、上越の人口は減少傾向にあります。でも、これからもこの傾向は続いていくのでしょうか。

東京などの大規模人口集中地区をみると、家族を形成するのがだんだんと難しくなっています。というより、難しいと考える若い層が増えていることは事実です。

なぜか。いろいろと事情はあるでしょうが、世間から守ってくれる親の家から、出ていく勇気と必要性を感じないという声も強いのです。逆に言えば、家を出ていった場合、生活していくことに不安がいっぱいあるということでしょうか。狭いうえに高い家賃を払えないという本音も聞こえてきます。待機児童などにみる不満足な育児環境も家庭形成をためらわせます。また、劣悪な住宅や生活環境から家庭内に波紋が起き、家庭に嫌悪感を持つ若い人たちも少なくありません。それに、たくさんの人たちがせめぎ合い、ストレスも大変です。精神を病んでいる人も少なくありません。

こうした現象を端的に言えば、東京などの都市では人口飽和の状態にあり、受け入れ能力の拡大余地が少なくなっているともいえます。ロンドンやパリも、かつて同じようなことを経験してきました。日本の大都市でもこれ以上、人口増加することは無理かもしれません。

では、今後の上越も同じような事情で、人口減少は続いていくのでしょうか。私は、長い目でみれば上越の人口減少はだんだんと収まり、逆に増加するかもしれないとみています。このことを考えるうえで、次の三つの点

を検討してみたいと思います。

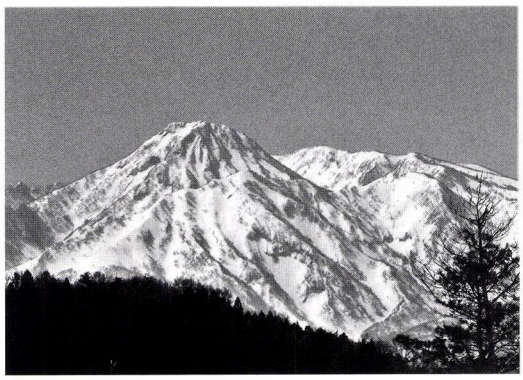
① 上越の受け入れ能力には余力あり！

上越では、東京のように都市としての受け入れ能力の低下が起きているのでしょうか。いな、人口減少が続くなかで、受け入れ能力はむしろ拡大しています。

充分すぎる空間と大都市とは比較にならないほど安い住宅費で住むことができます。東京とは住宅事情がまったく異なっています。そして上越は自然に恵まれ、ゆったりと流れる生活のリズム。適度な文化レベルを持ち、生活を愉しむゆとりが感じられます。

② 東京との時間的距離の縮小

上越の人口減少の要因の一つが、若い層の東京など大都市への集中です。しかし、上越には二年半まえから東京から乗り換えなしで二時間という新しい機能が備わりました。東京から二時間の距離にある中規模都市の上越は、企業にも大都市の住宅難民にとっても、かなりの魅力があることは間違いありません。その意味で東京を中心とする首都圏との交流の機会が増えていくはずです。



早春の妙高山

規模は違いますが、仙台を例にとってみます。一九八三（昭和五八）年に東北新幹線が開通し、仙台は東京から一時間四〇分の距離となりました。当時の仙台の人口は約八〇万人、現在は一〇五万人で三〇％の増加です。しかも注目すべきは、現在の住民のうち七割弱の人が、一度は仙台以外に住んだことがあるということです。つまり、よその地からのUターン・Iターンが七割弱を占めているのです。その要因は種々あるでしょうが、新幹線の効果が人口増のベースとなっていると思われます。

上越でも東京との時間的距離の縮小が、若い層を受け入れる環境の整備に結びつけば、若い層の大都市志向にも変化が出て、人口減の要因を薄めることになるではないでしょうか。

今はまだ、この上越の魅力が知られていないため、東京などからの関心はそれほど強くありませんが。

③ 外来人の増加

これが最も大きな変化になるかもしれませんが、上越に他地域や外国など外からやってくる人が増える可能性があります。

東京からの時間的距離の縮小も大きな要素ですが世の中を見渡したとき、経済や生活環境のよい地域や国において人口が減ったということは、戦争などを除いて、ほぼないという事実があります。

私は四〇年以上も前に、西ドイツ経済について、簡単な小冊子を著したことがありますが、内容は、西ドイツは一九六〇年代に経済成長の屈折点（成長が止まった）を迎えたが、その後、南欧やユーゴ、トルコからのゲストアルバイター（外人労働者）に支えられて復活しているというものでした。生活環境のよい西ドイツをめざして移民が押し寄せたのです。結果として人口は増え、経

済も安定成長へと舵を切りました。

最近、中国から来た経営者に上越で会う機会がありました。彼は上越を評して「水と空気、それに食が抜群にうまい」と言ってくれました。私の感じていることと同じです。

彼の会社が属する企業グループは極めて大きくて、傘下のアスレチッククラブは、会員数七〇〇万人弱で、中国でも有数の規模といわれています。なにしろ、北京で開催されるある超有名な国際競技会の運営を請け負うほどの力を持っているのだそうですから。

その彼が、北京では星空がみえるのは一年でも数日しかないと言い、「中国人が上越のことを知れば皆、来たいと言うはず」。傘下の旅行会社を使って「一〇万人規模で連れてくるだけの自信がある」と付け加えました。

私は、大いにあわてて、なにとぞそれだけはご勘弁をとお願いしました。今の上越にその受け入れ能力もないし、上越の文化が破壊されそうな気がしたからです。しかし、なにかの拍子で実際におきる可能性はあります。

また人手不足から、東京や首都圏で起きているように、一定の訓練を受けた外国人がやって来ることも大いにあります。

こうしてみてくると、上越人は減るかもしれないが、他地域出身者や外国人などの外来人が増え、全体として、上越の人口は減らないと思われるのです。

上越にとっての新たな課題

私の予想すること、つまり、「大都市や外国からの外来人が押し寄せてくる、あるいは増えてくる」ということが現実とならないようにと願うばかりですが、仮に、そうなった場合、何が課題で何が問題なのかを考えておく必要があります。

課題は、一言でいえば「上越人は、その外来人を使うのか、外来人に使われるのか」ということです。問題は後者の場合、上越人の子孫がどうなっていくのか、上越の伝統や文化の行く末が心配になります。

一九八八（昭和六三）年、私が駐在していたオーストラリアでも、実は、まったく同じことが論じられました。その年は、アーサー・フィリップ大尉率いる移民船第一号（ファースト・フリート）を迎えてからちょうど二〇〇年目にあたります。一月二六日の英国植民記念日（原住民以外にとっての建国記念日）には、シドニー湾に無数のヨットが浮かび、日本からも、大型帆船の日本丸（船長は、南本町三丁目出身の大杉氏）がやってきました。

一九八〇年代は、資源不況から同国経済が行き詰まり、一方で、日本からの猛烈な不動産投資や非欧州系移民がどんどん増えていました。とりわけ、アジア系移民（香港、ベトナムなど）の子弟は学校の成績でも上位を独占するありさまですから、英国系の豪州人にとって、子供たちの将来を真剣に危惧する声が強く湧きあがりました。

テレビ番組でも三夜にわたって「オーストラリアの未来」と称する特別番組が組まれました。オーストラリアは今後どういう国にすべきか。もちろん、結論は出なかったのですが、およそ、二つの意見に集約されました。

一つは「農産物と資源がたっぷりとある国だから、他所から人を入れず、鎖国して自給自足すべし」というもの。もう一つは「我々も勉強してアジア系移民に負けないようにする」ということでした。幸い九〇年代後半になって資源市況も回復、なんとか多民族の共存共栄を保

つことができています。

ちなみに、オーストラリアの人口は、一九八〇年代の一八〇〇万人から現在は二四〇〇万人と、三〇年間に三〇％以上も増加しましたが、アジア人に社会が乗っ取られたという話は聞きません。これは、以前からの住民（英国系）も移民に負けないように頑張ったためかもしれません。

新たな課題に挑むには
――上越人に求められること

外来人を使う立場になるためには、今、上越人にとって何が必要でしょうか。簡単に言えば、外来人よりも優れていることです。では何に優れていなければならないのでしょうか。以下、三点を上げてみます。

1 連携力で優（まさ）ること

外来人がいかに大勢やって来ようとも、各グループ単体では、上越全体の人口二〇万人に比べれば少ない数です。外来人が上越で何か行おうとしても、上越の事情や情報については、上越人のほうがたくさん持っています。その点では上越人に頼らざるを得ないのです。

しかし、少数の外来人が多数の地元人を制した歴史もあります。一八四〇（天保一一）年のアヘン戦争では、一万人足らずの英国人が、二〇〇〇万の中国人が住む地域を制したのです。それには武力だけでは不可能でした。綿織物やアヘンを用いた経済的制圧もありましたが、軍事的衝突を行う前に謀略や懐柔を用いたのです。説得したり、味方につけたり、騙したり、相互対立を起こさせたりすることで、狙った地域を一個一個、陥していったというわけです。

どうしてそんなことが出来たのかと言えば、中国の各地域がお互いにあまり繋がりがなく、地域がバラバラで孤立していたことが、悲劇を生んだといわれています。分断して統治するという英国植民地のお得意戦術にまんまと引っかかってしまったのです。

こうなってはいけません。つまり上越人がバラバラだと、極論ですが、アヘン戦争のときの中国と同じくなる惧（おそ）れがあります。上越人は、歴史と伝統ある上越のなかで、現在の状況や情報を共有していくべきだと考えます。

つまり、連携力で外来人より優れていなければなりません。そのためには、日頃から連携力を鍛えておくべきだと思います。難しいことではなく、日頃から隣人と仲良くしておくことが必要です。まさに、「仲よきことは美しきかな（武者小路実篤）」です。

2 展望力で優ること

上越で話をしていると、「もっとこうした方がいいのにと思っても、まあいいやとなってしまう」ということをよく聞きます。考えはいい線まで行くのですが、新しいことにはリスクもあるため、結局は何もしないということが多いとも聞きます。これは上越に限ったことではなく、ちょっと裕福な地方都市にはよく見られる光景なのです。ですが、このように何もしないで行くことが、世の中の流れからみて、許されるのでしょうか。これからの世の中で起きるであろうことを把握し、しかも、自分たちの意思を保つために準備しなければなりません。

言い換えれば、外来人が増え、彼らに文化や生活を乱されないようにするため、あるいは彼らに使われるのではなく、使う立場になるための、しっかりとした展望を持つことが必要だと思われます。そのためには、展望を描くための力＝展望力を身につけることでしょう。

では、展望力とは何か。そして展望力を身につけるために何をすべきかを考えます。

① 展望力とはなにか

展望力の三つ要素を簡単に表せば次のようになります。

展望力＝未来への信念＋客観的視点（自他を客観視できる）＋抜群の実務能力。

・未来への信念とは、（自分や上越の）未来のありたい姿を描くこと。

・客観的視点（自他を客観視する）とは、自分や他人のこと、時代の流れなどを客観的に見つめ把握すること。

・抜群の実務能力とは、―自身の得意分野に関係があると思われる―未来のありたい姿に向かっての実務能力を発揮すること。

② 展望力を身につけるためには

未来への信念や抜群の実務能力は、自身の努力によって、ある程度まで獲得することができます。

問題は客観的視点の修得です。自分と他者、そして社会の動きを客観的に視るというのは実に難しいことです。そのための材料とその目安、モノサシがなければなりません。ただし、その収集だけでも、かなりのエネルギーを必要とし容易ではありません。

例えば、上越もやがて巻き込まれるであろうグローバリズムの動き（材料）があります。このモノサシは、弱肉強食（それに早もの勝ち）の程度ですが、上越にいて、そうした情報を得るのは難しいでしょう。

かつての鎖国の日本では、ペリー提督がやって来る前に、欧米列強がアジア侵略を進めているという事実を知ることが難しかったことを見ればわかります。

それでは、どうしたらいいのでしょうか。外部にアンテナを張ったり、外部の上越ファンや専門家から情報を得ることです。その得た情報を文殊の知恵よろしく、皆で検討し共有化する仕組みを作っていくというのも一法だと考えます。

3 人材で優ること

これは文字通り、有為にして優秀な人材を外来人よりもたくさん揃えるということです。上越でそんなことが可能でしょうか。実は可能です。理由は二つあります。

① 歴史と伝統は、独創性に富む文化と人材を作る。

意外かもしれませんが、歴史と伝統というのはいいものを創造する源です。

例えば京都。そこは、新しいものを創り出す独創性に富んでいます。俵屋宗達、尾形光琳はじめ琳派の人たちを輩出しているという事実があります。この人たちの斬新さと独創性は、京都の染物師や織物師、屏風師の技を引継ぐことから生まれてきたといわれています。

企業でも、任天堂、京都セラミック（京セラ）など京都で活躍する創造的企業は枚挙にいとまがありません。帰ってきた酔っ払いのフォーク・クルセーダーズの出現も衝撃的でした。

このように京都は自身のもつ独創性（オリジナリティ）を保持したまま、それを発展させ新たな独創的な文化を創り出してきたのです。独創性を引継ぎ、さらに新しい独創性を創りだしていくこと、これこそが伝統でしょう。その伝統の移り変わりが歴史です。

言いたいことは、我が上越にも充分な歴史と伝統があり、優れた文化と人材を育んできたということです。―上越を見くびらないでほしい―ということです。前島密翁や川上善兵衛をはじめ、キラ星のごとく人材を輩出しているではありませんか。猛勉強は他所の地で行って

も、基本的な素養は上越やその周辺で習得しています。「三つ子の魂百までも」です。

つまり、わが上越はその気になれば、歴史と伝統に支えられた文化によって、人材育成の基盤がある地であると確信しています。

② 経済構造が首都圏との交流融和型

先にあげた仙台と同様、上越の経済構造は農業偏重でもなく、首都圏型に近いのです。

上越市の市民総生産をみてみましょう。

平成二六年度では、総額七七〇四億円です（上越市役所HP・企画政策課資料）。内訳としては、農林水産業の第一次産業が一〇二億円、工業の第二次産業が二五六五億円、建設サービス業の第三次産業四九九六億円、税その他四〇億円。

これだけ大きな面積を占めている農地でも、稼ぐ金額はそれほどではありません。工業や建設に依存したまちであることが分かります。もちろん商業、サービスのウエートも大きくはあります。

これは首都圏型の都市構造であり、考えや意識のうえで首都圏との交流が容易です。つまりは頭を柔らかくして、自身を縛っている閉鎖性を打破し、首都圏のアイデアや、アイデアに富む人材とどんどん交流すればいいのです。こちらが、自分の立脚する文化をきちんと意識していれば、交流を恐れることはありません。



日本海の穏やかなひととき

ついでに仙台との比較でみますと、同じ城下町ながらも、教育研究機関（大学）の機能において相当な劣後にあるということを付け加えさせていただきます。

当面、上越が取り組むこと

ここまでは長期的視点に立って、来たる時代に対応すべき課題について述べてまいりました。しかし、一挙にそこまでは準備も実現もできません。そこで、当面の前工程について考えてみたいと思います。指摘したいのは次の二点です。

1 戦略の専門家を育成する

必要ならば、専門家を育成するための専門家を利用することも考えるべきでしょう。

長期的には、①戦略の専門家、②開発人材、③観光人材などが必要でしょうが、まずは①の戦略の専門家を育成すべきだと考えます。

戦略の専門家とは、このまちの青写真を描いて、段階を踏んで絵を描くことの出来る人材です。ここで注意すべきことは、戦略の本質まで遡るためには、未来に身を置いて発想する必要があります。現状をベースとした発想では、所詮、アイデアは限られてしまうからです。

米国では、このようなことを専門とする研究機関や専門家がいます。ひと昔前なら、ジョンズ・ホプキンス大学のプレジンスキー教授が典型的な例です。彼は、『ひよわな花・日本』を著し、一九八〇年代の日本の強みと

弱みを徹底的に洗い出し、そのうえで未来を見据え、米国の対日政策の戦略を立案しました。それは日米構造協議として現れ、上越では農地を商業地に変換したウイングマーケットセンターがその成果物です。

私が会った専門家では、ウイリアム・モーアさんがいます。サンフランシスコをベースとするベンチャー・キャピタルH&Qに属するベンチャー・キャピタリストでした。同社は、アップル社にも立ち上げ時に投資をしたことで知られています。モーアさんは、そうしたよちよち歩きのベンチャー企業を立派に一人前にしていきました。アップル社やLSIロジック社をはじめナスダック上場会社には彼の手をかりた会社が少なくありません。

モーアさんは、アメリカ人にもかかわらず、背丈が一五〇センチ以下、右手の指は薬指と小指がくっついていました。学歴は中学卒程度で、技術についてはほとんど知らないのです。しかし、企業戦略を練ったり、困った時、経営に迷ったときには、モーアさんを訪れるベンチャー企業家が大勢おりました。彼は生き方について語ります。アップル社のスティーブ・ジョブズ氏なども彼に励まされました。モーアさんは亡くなっても最高のベンチャー・キャピタリストと評価を受けています。

このような専門家を上越内部で調達するのが困難かもしれません。それなら、専門家を育成する専門家の手を借りることも考えられます。

私にはそうした能力はありませんが、心当たりがないわけではありません。しかし今回は、ここまでで止めておきます。

2 稼ぐものをつくれ

専門家を育成するためにおカネが要ります。行政マネーに依存すると、行政の発想に縛られてしまいますので、本来の目指したものができません。京都では来年から宿泊税を検討し、ニセコでは不動産所有者に負担を求めています。

上越ではどうか。まだ明かすことができませんが、よそでは見られないような名物施設の設立プランがあります。コンセプトも決まり、運営のための材料、人材、資金などはすでに用意されていますし、集客もほぼ見通しが立っています。事前のマーケティングでもきわめて好反応が出ています。

上越大好きのスポンサーの了解を得て、この名物施設の経営に有為の人材が参加して、その収益の一部を人材育成に活用するのも一法でしょう。

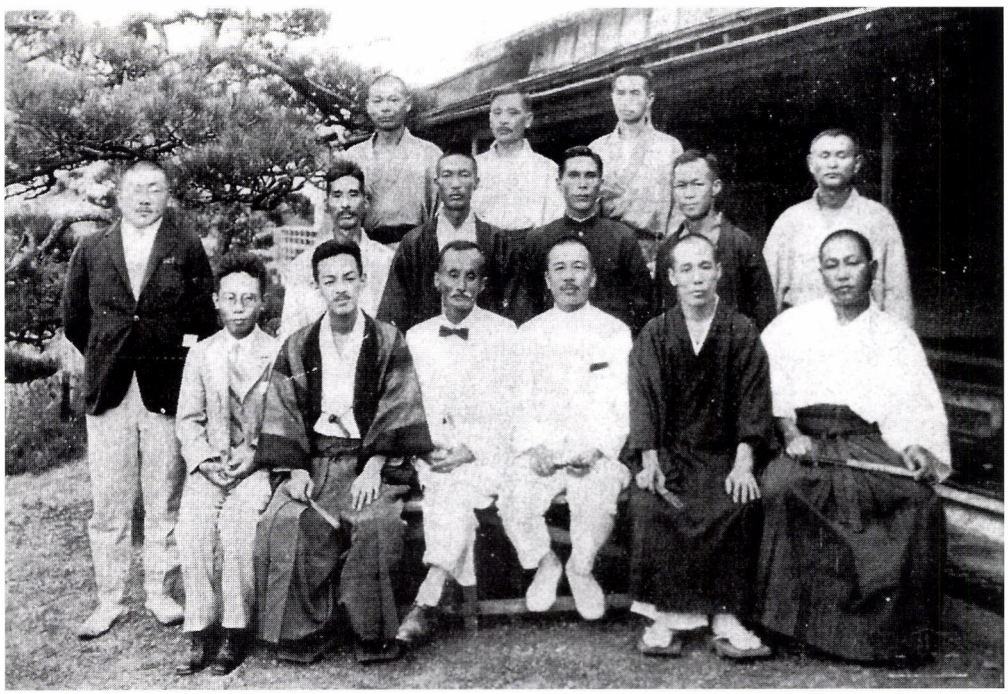
最後に

この四年七ケ月、私は、J－ホールディングス七施設の経営に携わってきました。結果は七社中、黒字化を経験したのは六社。残る一社もあと一息のところまで来ています。

この間、リストラは一人も行わず、主としてスタッフ・ミーテングという手法を使いました。これは、いわば井戸端会議です。スタッフの皆様は自主的に実によくやっていただきました。

いま振りかえってみますと、その手法を持ち込んだのは私ですが、実際に、それを遂行したのは、各社のスタッフです。スタッフの力で立ち直ったのです。

もうお気づきであろうと思いますが、上越には、大変な底力があります。ただ顕在化せず、蔵の奥深くに仕舞っているだけなのです。出し惜しみをせず、上越の伝統と文化の力を信じ、独自性を発揮するときが来ているのではないでしょうか。





「五智保勝座談会」
その１
（五智和倉楼の記念館）

『おらが在所』は、昭和五年に「東京日々新聞」（毎日新聞）高田通信所が、一市三郡の名士の各座談会を開催して「新潟版」に連載、それを上越座談会集刊行会が一冊にまとめたものである。題字は史跡探訪のために訪れていた徳富蘇峰の手になる。八〇年も前の座談会は、今も変わらぬ問題を提示し、示唆に富んだ内容である。

旧漢字旧かなは現代文に改め、また基本的人権にかかわる発言もあるが時代背景を考慮してそのままとした。

■出席者

前列右から

堀前　惠三　光源寺住職
金子　昭道　国分寺別当
斎藤　秀平　上越考古学研究会副会長・高田師範教諭
川合　直次　五智保勝会顧問・高田市長
荊木　久一　五智保勝会理事・弁護士
田中　光武　東京日々新聞高田通信所記者
渡邊　義房　東京日々新聞高田通信所主任

中列右から

山本太郎吉　善光寺大本願別院十念寺世話人
岩片吉五郎　五智保勝会理事・和倉楼主
渡邊　喜一　国分（府）青年団代表
久保田喜一　国分（府）小学校長
花前輝千代（花ヶ前輝千代）　県社居多神社社掌

後列右から

山口榮次郎　五智保勝会常任理事
瀧川　美堂　五智保勝会理事・彫刻師
岡本　喜助　善光寺大本願別院十念寺世話人

居多神社の再興
―由緒では越後一―

渡邊　ここに名勝五智の発展策に付きお話をお伺いします。ついては川合市長さんに座長格になっていただきたいと存じます。

荊木　座談に入るに先立ち保勝会を代表しまして、ちょっとお礼申し上げます。ここに座談会を開会「東京日々新聞」に連載していただくことは、まことに光栄の至りで厚く御礼申し上げます。

川合　それでは、私からお話の緒を切ることにいたします。まず、五智保勝会の事業として何よりも先にしなければならぬのは県社居多神社の再興と思います。居多神社の創立は神代かと思います。居多神社は大国主命と奴奈川姫が御同棲あそばされ、東北日本の経略にお当たりになった尊い遺跡なのであります。

　神社としましても『日本後記』によりますと弘仁四（八一三）年七月神位従五位下を授けられ、弥彦神社が承和九（八四二）一〇月、同じ従五位下を授けられたのに比べますと二九年前なのであります。また『三代実録』によると、居多・弥彦両社とも貞観八（八六六）年、同時に従四位下に叙せられています。その辺から見ましても、少なくとも弥彦神社と並んで国幣中社に昇格せねばならぬと思います。それを今日のままにしておくのは、地元上越の人々の遺憾に思うところで、再興昇格の方法如何につきまして皆様のご意見を聞きたいと存じます。

斎藤　部門武将が盛んな、あの戦国時代にさえも、居多神社に対する崇敬の念の厚かったことが偲ばれるのは関東管領（鎌倉公方）足利満兼が上、中、下越に六万石の土地を寄進し、その安堵状が残されていることです。いかに戦国時代の殺伐な時でも関八州の支配者が崇敬したのは興味あることで、花前さんから伺ったのですが、その後、徳川時代になってもこの神社の前はどこの大名も下馬下乗しなければならぬとされていたそうで、やはりこの時代にも他の神社と異なり非常に尊いものとされていたのです。

　もちろん文書も言い伝えもあります。その神社が現在のように荒れ果てた状態になっているのは、結局、時代の変遷ではありますが、五智地方の経済状態にも非常に関係があると思います。その点から、この地方の経済状態を豊かにすること共に、いかにした崇敬者を増やし、これらの人々を集めるかを考えたら、結局、社殿を立派にし、昇格させることが五智の繁栄策になると思う。五智の経済状態と社殿と神域の立派になることは、結局、

明治維新後、「延喜式」にならって神社につけられた等級。国（大・中・小）・県・郷の順に社格が付けられた。

「三代実録」延喜一（九〇一）年、清和・陽成・光孝の三代の天皇時代の三〇年を記した史書。



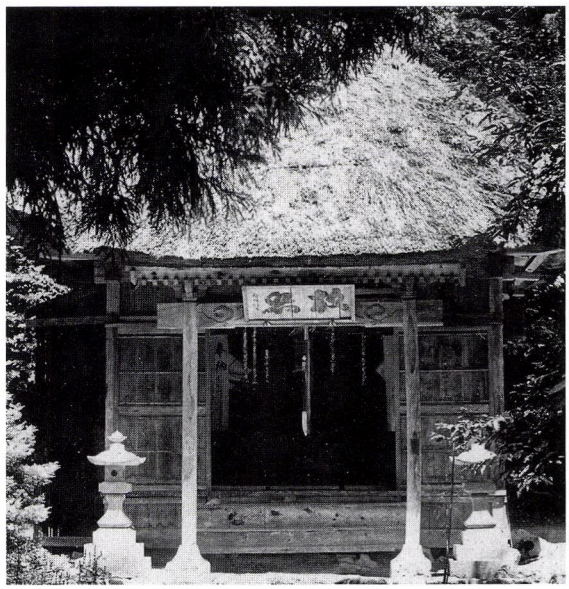
県社居多神社
越後五智
（大正時代絵はがき）

本地垂迹説　仏教の興隆によって、日本古来の神々は仏が化身として現れたものとする説。神仏習合。

関連したことなのです。その点から見て、多くの遊覧者を集めることが必要だと思います。

荊木　昨年、昇格運動に一石を投じる意味で地元氏子の委嘱を受け、社司の花前輝千代氏、直江津の片田九十八氏と同伴、内務省へ行きましたが、経済的の点で、いかんともすることが出来なかったのですが、この際、運動を起こすなら（内務省として）援助も惜しまぬし、県の方へも力を貸すように心配しよう、と言っていました。昇格運動を起こすとすれば社殿を造り替えねばならず、それも中世風の造りにしなければならないのです。社殿の造営、境内の整理に一五万円の費用ができるかとの話で、昇格運動も今のところ全く行き悩みの状態なのです。これから五智の保勝運動としての困難な居多神社の昇格に力を注ぐか、五智の多くの史跡その他に力を入れたのものか、その点も考えてみたいと思います。

川合　二つともしなければなりません。当面に急いでせねばならぬことと、功を永遠に期する事の二つになりま



五智国分寺奥の院岩殿山
（「新潟県写真発展号」大正４年刊）
元禄２年再建されたと伝えられている

す。居多神社問題のごときは、後者に属する方でしょうが、昔から不景気時代に事を進めたほうが、多く成功すると言われていますから、今が再興運動の準備に着手すべき時でしょう。

荊木　では当面の問題として、まず宣伝をした方がいいか、それとも実際の社殿造営を開始した方がいいでしょうか。

川合　宣伝の方からでしょう。神社の存在や、その尊い由緒さえ知らぬ人が割合に多くありますね。

斎藤　その方がいいですね。

岩戸山（岩殿山）参詣道
――国分寺の表大門

川合　続いて第二の問題は岩戸（いわと）山の道路開削の問題です。いうまでもなくこの地方には名のある仏像が少ない。その中に光を放っているのが岩戸の大日如来です。

　口碑によると、岩戸山は建御名方命、すなわち諏訪大神の生誕の地なのです。後の名僧知識が、いわゆる「本地垂迹」の説などから考え付き、国分寺の奥殿をここに定めたのだと思います。

　ところが遺憾なことに、この山に通ずる車道が無いので、高貴の方々の御登りを乞うことが出来ないのです。自動車は難しいとしても、少なくとも人力車の通る道を開削してもらいたいと思います。格別高い山でもなし、多くの費用もいらぬと思いますから。

斎藤　大日如来の所へ行く道は、ぜひ開削しなければいけませんな。あの登り口がとても悪いのです。

荊木　あそこへ行く人は、五智へ来たついでに行くのもあるのでしょうが、大日如来そのものを拝みに来る人な



大日如来坐像
新潟県国宝指定第１号（現在は国指定重要文化財）

のでしょう。場所を変えるわけにはいかないでしょうか…。あの位置は昔からの位置でしょうか。

金子　昔からそのままです。あの奥に窟（いわや）がありますが、あそこが諏訪大神のお生まれになったところだといいます。

鞍馬、比叡などずいぶん険阻ですが、交通が便利になり、今では子供、年寄りでも自由に登れるようになっています。この土地の誇りとすべき幾多の遺跡を有するにかかわらず、まるで山の中に葬ってあるという有様です。道路開削の方法は現在の道の下の方、すなわち山の裾の方に作場道がありますが、あそこのガード（鉄道の鉄橋）の所から急に山に入らず、少し道は遠くなりますが作場道に入って、それに所々手入れしていったら、大日様の下に行けるから、このまま自動車で行けるようにして、そこから石段でも造って登るようにしたら絶好だと思うのです。

現在のままでは、百人の人が国分寺まで来ても大日如来へ行く人は十人くらいしかないありさまで、実際嘆かわしい次第です。

川合　居多神社にしろ国分寺にしろ、旧位置から移されているということは、そのかちを殺（そ）ぐこと大です。大日堂を他へ移すのはいけません。道を造ったらいいわけです。

金子　先刻お話ししたように下まで自動車か車（人力車）で行って登れるようにしたいものです。

荊木　国宝に指定されたのはいつ頃ですか。

金子　明治三二年（正しくは三九年）四月です。

川合　この問題（道路開削）は、ぜひ考慮を願うといたし、第三の問題は国分寺の入り口です。現在のままですと、正門が非常に閑却（なおざり）にされた形です。道路の横から裏口へ入るとすると、どうしても荘厳みに憾みがあります。この欠陥を補うために東口の石段を生かし、学校（国府小学校＝字押出小路＝国分寺東口の東方向）から、もしくは養爺清水の前通りから道をつけたいですね。

金子　直江津の有志も盛んにそのことを言っておられますが、実は十年来の問題で先代の時から考えられていたことです。裏口の切れた当時、やむなく現在の道をつけたのですが、お堂の向きも替わっています。旧街道を利用して正面から入るようにするには、田んぼには新たに道を開いていかなければなりませんから、二重の手数がかかります。ですから今の駐在所の付近から、斜めに境内に入るようにするのが最も至当だと考えます。

川合　元禄以前は東が正面であり、お堂も東向きであったのです。それは国府が東の方にあった関係です。それを南向きにしたのは、新たに築かれた高田城が南にあたるからでしょう。ですから、東に向けることは昔に返すことになります。『三才図絵』（「和漢三才図絵」）には、お堂は一三間四面、東向きとあります。お堂は無論今のままでいいのですが、入口だけでもそうしたらいいでしょう。

「和漢三才図絵」正徳二（一七一二）年に成立した百科事典。

荊木　東の入り口の方を今でも大門と言っていますが何かそれと関係があるのでしょうか。

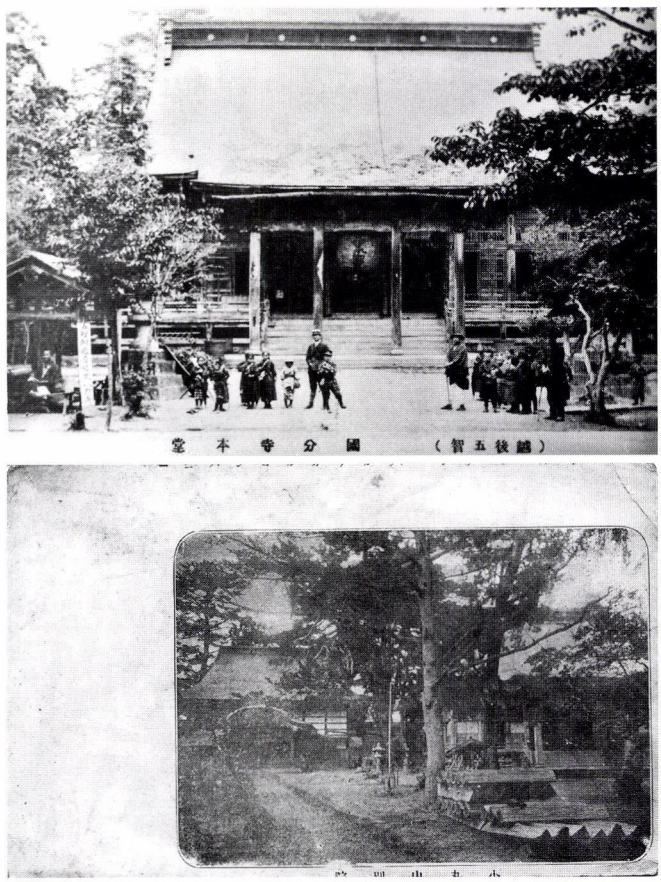
川合　昔、大門があったからです。

金子　とにかく、この五智国分寺へ入るのにお堂の裏から入るというのは困ったことです。どこへ行ってもこんなところはありません。

親鸞聖人の遺跡
―日の丸名号伝説―

川合　第四の問題は、親鸞聖人の遺跡顕揚です。親鸞聖人は承元元（一二〇四）年から建暦元（一二一一）年まで五ヵ年間、この五智浜にいられました。鏡の池、小丸山別院（国府別院）竹之内草庵、光源寺などはその遺跡であります。近頃、親鸞聖人の銅像を建てるという話がありますが、どこまで進んでいますか。企てた人はまじめな人ですか。お聞きしたいと思います。

金子　今までに銅像の話は前後三回あり、これが三回目にあたります。前二回は計画があまり突飛で面白くありませんでしたので、握りつぶしてしまいました。ところが昨年春以来、金沢の人で、高坂松男という真宗に凝り固まった人で、現在、九州の小倉にある仏教済生会支部長をしている六二歳になる老人ですが、その人がぜひ自分が奔走して親鸞聖人の銅像を建てたい。その動機というのが日露戦争の時、廃兵（戦闘で負傷し再び兵役に服すことが出来なくなった兵士）になった九州の人で念仏軍曹と言われた人が、四万円の金を集めて、全然、親鸞聖人に関係のない小倉の町外れに銅像を建てたのを見て、あの人にさえあのようなことが出来るのだから自分にもできないことはなかろうというので、銅像建立の念



上　国分寺本堂　越後五智（大正時代絵はがき）
下　小丸山別院（国府別院）
　　明治 40 年以前の絵はがき（高田・光山石板所印刷）



親鸞上（聖）人御旧跡鏡が池（大正時代絵はがき）

願を固め、由緒深いこの地に建てるのが最も当を得ていると決心したのです。そこで、昨年春以来、宣伝するとともに、仏教済生会の布教伝導のかたわら、大分、関西方面にも宣伝されている様子です。土地の有志からも賛同を得、また、真宗一派の寺院本山あたりへもつてを求め、大分、寄付が集まっているようです。しかし、いつごろ建つようになるか、それは見込みが付きません。

荊木　予算はどのくらいでしょうか。

金子　三〇万円とか言ってました。しかし、それは銅像だけでなく、付近の開拓（整備）する費用も含んでいるらしいですが、そうたくさんの金額はどうですか……、けれども今では仏教済生会全部が、この銅像建設運動にのり気になって全国運動をやっている形になっています。

川合　位置はどこでしょう。

金子　大きなものですから、狭いところでは二、三千坪の場所をとるものも考えもので、幸、私の寺の所有地が三重塔の東に大分広くありますから、あの辺がいいと思います。

川合　低くありませんか。

金子　風致を保存するため、そのままにしておいて、銅像を建てるところだけ高くしたらいいと思います。

老人が、五月にここから帰るときに、こんな時世だから一度にみなはとても駄目だし、銅像だけなら三万円もあれば建てられるから、と言って別れましたが、その後何も言ってまいりません。

堀前　私の寺に「親鸞聖人蓑笠の御真影」と申すものがあります。聖人行脚のお姿ですが、ほかに類型のないものだそうです。大阪の四天王寺境内に新たに建てられた御銅像は、この御真影を原型としたものでありますし、高坂氏が五智に建てようとする御銅像もこのお姿にしたいものだと高坂氏は言っていました。

川合　居多神社に「日の丸の名号」というのがありますが、あれについてお話を承りたいと思います。

花前　承元元年、親鸞聖人が居多の浜にお上がりになった時、私の所の第二五代目、彦三郎盛長弟助（堪）惣景保と申す者に、居多社の由緒をお尋ねになり、参詣されて祈願をこめてお出になると、ちょうど夕方でしたので太陽が日本海の崖に沈んでいく美しい景色をご覧になり、私の唱える「南無阿弥陀仏」もあの太陽のように、四方八方に広めたいとおっしゃって太陽をお書きになり、その中へ六字の名号をお書きになったものです。

川合　日本海沿岸の夕日の景色は実にいいのですが、六字の名号を書かれたというところに微妙な感じがします。

金子　それを居多神社に挙げられて祈願せられたものと思われます。

末遠く法を守らせ居多の神
弥陀と衆生のあらん限りは

という歌をお読みになっています。

川合　五智へ来る人の多数は、親鸞聖人の遺跡を見に来るでしょう。

金子　七分を占めているでしょう。

川合　和倉楼で遊ぶ人はどうです。

岩片　国分寺参拝の人もあります。

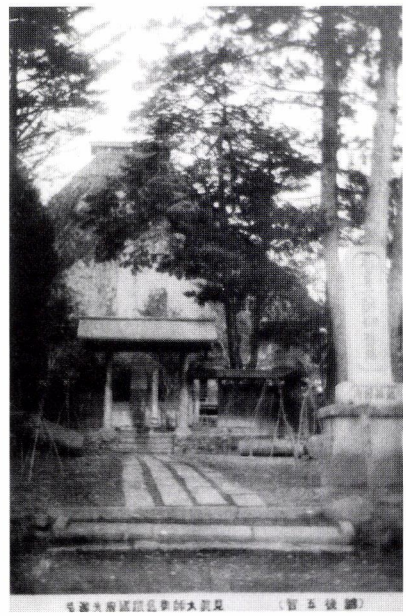
川合　長野県の人が多いですか。

岩片　長野県は私どもの広告の的としていますから多いわけです。しかし北陸線が出来てから関西地方の人も増えましたし、東北方面から来る人も多くなりました。むしろ磐越線から来る人が多いかもしれません。福島、宮城の方です。

金子　秋田、山形県方面の人も大分来るようです。

村上義清の墓所
―謙信公埋葬異説―

川合　第五に御相談願いたいのは、村上義清の墓のことです。上杉謙信公が有名になった川中島二五年の戦い。





上　見真大師御旧跡国府光源寺
　　越後五智　（大正時代絵はがき）
下　親鸞聖人像　五智国分寺境内
　　昭和 12 年、宝塚市広瀬氏建立

あの敵に塩を送ったという歴史に例のない美談を残された基とは、村上義清が武田信玄に追われ、謙信に救いを求めたのが始まりです。

　謙信公は越中のこと、関東のこと、すべてを始末せねばならぬという多事な場合にもかかわらず敢然として義清に一諾を与えたのです。義清の存命中に信玄を全く信濃から駆逐し得なかったのは、さだめて謙信公にとって心残りだったのでしょう。

　公は恐らく義清の死を聞きあそこへ墓を築いてその霊を慰めたのでしょう。義清の墓は信州の坂城にもありますが、あれは後からできたもので、遺徳を慕う地方の人々が造ったものでしょう。ここの墓は、あまりにも民家の墓と接近しているし、また大いに頽廃しているのは遺憾なことです。

荊木　墓地の狭隘からです。

川合　せめて垣でも造ってやりたいものです。春日山と連携して大事な遺跡です。

滝川　ぜひ、保勝会で計画を立てたいと思っております。幸い、上田に村上義清の後裔が師範学校で教鞭をとっておられますし、また故郷坂城にも崇拝家がたくさんあって、五智の人が光源寺の墓所を立派にするならい

くらでも助力する、と言っていたと聞いていますから、保勝会の仕事としての面目を損じない程度に手入れしたいと思います。

荊木　あの墓に手を入れるのはおもしろくありませんが、民家の墓を少しどうにかしたいと思います。そして垣をめぐらし立派な遺跡として知らない人に知らせたいものです。

堀前　もと、垣があったのですが、今は朽ちて亡くなったままになっているのです。

金子　今、滝川さんのお話になった信州のお墓の話は向こうから直接お聞きになったのですか。

滝川　一〇月には向こうへ参りますから、詳しく聞いてきます。

金子　光源寺の阿弥陀如来が義清公の守り本尊だったそうですね。

堀前　そうです。

花前　義清公の墓で思い出しましたが、謙信公の墓は、



村上義清建立の供養塔（光源寺境内裏）
かつては村上義清の墓所として伝えられていたが、義清が父の菩提を弔う供養塔とされている。（上越市歴史の道しるべ）

十念寺建立諸説
弘治一（一五五五）年
永禄四（一五六一）年

もと岩戸山にあったと居多神社の社伝記に書いてあります。この社伝記をご覧ください。「四至のうち西北に岩殿という山あり、この地、輝虎卿の墓所となしぬ。これ開闢より墳墓の始めなり、景勝卿は国替えの時、会津へ引き給うという」と、あるじゃありませんか。

川合　多くの書物には「春日山に葬る」とありますが、実際は岩殿山すなわち岩戸山に葬ったのでしょう。私は、この社伝記を確かなものと思います。

　花前氏の先祖が景虎に黨し戦敗れて能登へ落ち行き、社領家領を没収され、剰（あまつさ）え神聖な四至の内を汚されたというので、景勝に対して満腔の不平を抱いていたのが、子孫の手によって社伝記に書かれたものでしょう。と言ってよろしいと思います。



謙信公墓所（岩殿山 明静院境内）

新善光寺を興せ
―大本願を迎えて―

川合　第六の問題は、浜の善光寺の再興です。善光寺浜に十念寺という寺がありますが、天文二二（一五五三）年、上杉謙信が信濃の善光寺の大御堂の本尊を越後へ移し来

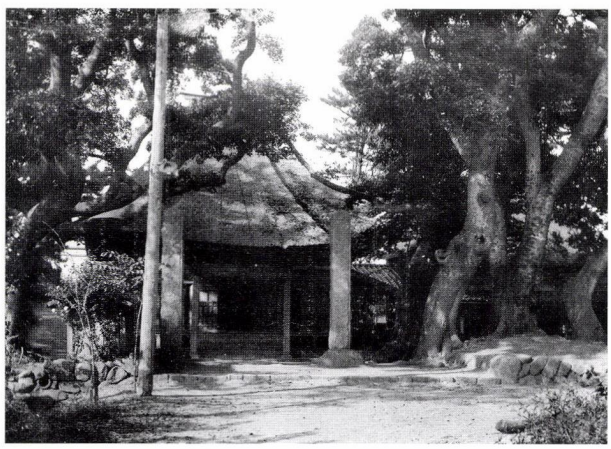
て、新善光寺を建立したというのは、まさしくあの場所であります。

当時、大御堂、すなわち里の善光寺は上杉家に、また小御堂すなわち山の善光寺は武田家に加担したのですが、付近すべてが交戦地帯となり、おのおのの安全を保し難いので、里の善光寺の本尊は越後へ、山の善光寺の本尊は甲斐へ相前後して移されたのであると聞いています。

渡邊　ナルホド…

川合　甲斐の方の本尊は武田家の滅亡後、織田氏に持ち去られ、さらに豊臣氏の手に帰し、一旦、上方に置かれたのであるが、豊臣氏にいろいろな不祥事が起きたというので、にわかに気味悪く元の善光寺へ返したと言われています。

越後の方の本尊は上杉家が会津へ国替えとなった時、持っていき、後さらに米沢に移し、上杉家の秘庫の中に深く蔵されていたが、一昨年、彼の地で謙信公の三五〇年祭を挙行したとき、はじめて開帳を許したのです。それを拝見すると一尺八寸三体の金銅仏で、天竺渡来の物に相違なく、付属している仏具なども隋唐時代のものと申されていました。



十念寺（「越佐大観」昭和８年刊）

瀧川　私も拝見しました。

川合　開帳後、米沢市で、その本尊をもらって新善光寺を建てたいと申し込み、また善光寺の大勧進（天台宗）からは、ぜひ当方にと申し入れがあったそうですが、上杉家では「善光寺の名をもって本堂へ安置するから」と言うて来るならやりもしようが、大勧進とか大本願（浄土宗）とか、一方のみの話では応じかねると大勧進へ断り、また米沢市へは熟慮中との返事をしてあると聞いています。

謙信公が越後へ持ってこられた前後の事情から考えると、それをこちらへもらい受けるのが最も公の本意に副う所以でないかと考えます。十中の八九は、事面倒だとは思いますが、試みに交渉してみたら如何です。

斎藤　由緒あるこの地方に安置した方がいいと思います。

瀧川　上杉家と米沢市との意見が合わず、上杉家では長野へやってもいいと言い、市はこれに反対し、大分もめたようでした。市としては二百何十年も伝わった宝物を他へやるのは惜しい、他へやるくらいなら市へ寄付してくれと出たのです。上杉家では寄付してもいいが、寄付した後で、また何か第二の物的要求を持ち出すのではないかと心配し、市では、そんなことを言わぬから枉（ま）げて聞いてもらいたいと執拗に持ち込み、今年の四月、話がまとまりかかり、米沢市で新善光寺を作ることになったと聞いていますが、事実はいかがですか。

斎藤　しかし、米沢で善光寺を造ると言うても、今は新しい寺の造営は許可されないから駄目でしょう。結局、仏像をもらったところで、どうにもならないのですから、それを適当の方法で申し受け、ここの善光寺へ祀ったら一番いいわけでしょう。

川合　そうです。こちらには十念寺があるのですから、それを由緒ある善光寺と改称すればいいわけです。浜善光寺という大字名さえ残っているのですから…。

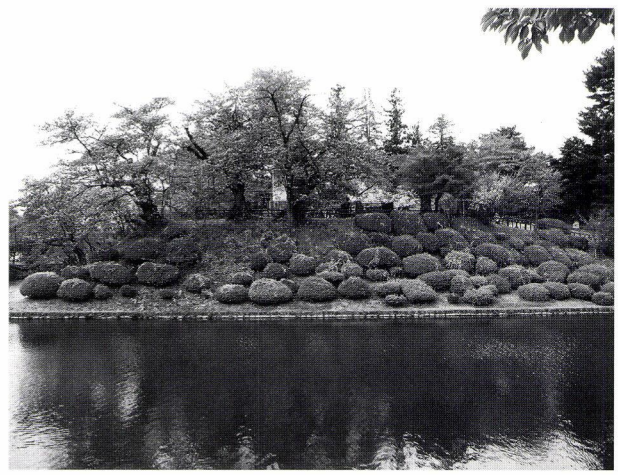
岩片　大本願の尼上人様にこちらへ別荘でも造っていただきたいと願っているそうですから、これが出来ればなおいいでしょう。

川合　十念寺には善光寺から遣わされた元禄時代の古文書などもあり、その関係はすこぶる深いのですから、善光寺の別院としてもいいわけでしょう。いまさら、あの仏像を善光寺へもっていって本堂の正面に安置もされず、といって米沢で新寺院の建設がむずかしかろうから、ここへ祀って謙信公の遺志に副うのが、結局、一挙三得ということになります。

堀前　信濃善光寺では十念寺を別院にしてもいいという事は、すでに承諾済です。

川合　そりゃもってこいの話ですね。それでは、この問題はこれで打ち切ります。

以下次号に続く





米沢城御堂跡
正面に明治まで上杉謙信の遺骸を祀る「御堂」があった。
同時に善光寺如来と泥足毘沙門天が祀られていた。
現在は上杉家の菩提寺法音寺（写真下）に祀られている。

国府―春日山―府中―直江津の空間を駆ける

春日山城と越後府中 5

港町と笏谷石～商品だったバラスト

小島幸雄

はじめに

平成二八年春、本誌に船の航行で大切なバラスト（ここでは船の安定を図る底荷をいう）について述べたことがあった。その時は主に焼き物（当地では瀬戸物）と御影石によって検証した。今回は港町によく見られる、笏谷石に注目した。笏谷石とは、福井市の足羽山で産出していた凝灰岩をいう。四世紀ころから使用されていたとされ、古墳の石棺や北ノ庄城跡の石垣、また城の屋根瓦としても利用されていた。福井地震で落下し、現在は天守閣の入り口に展示されている丸岡城の鯱瓦は、笏谷石で作られていることがよく知られている。江戸時代には商品として全国に運ばれたとされ、港町に笏谷石の製品が多く見られることがその証しである。

私たちの生活する場所に何気なく、黙して語らないさまざまな歴史の証人がいて、多くの情報を発信してくれていることを見ることにしよう。

バラスト

バラストは『広辞苑』（今回は手元にあった第二版第七刷、昭和四八年八月一五日刊）によれば、「船を安定させるための底荷などをいう。脚荷（あしに）」とある。また、底荷を見ると「そこ―に【底荷】(ballast) 船舶の吃水を深くし、重心を下げて転覆を防ぐために、船底に積む砂・石・石炭・塊鉄などの重量品。バラスト」と記されている。脚荷も引いてみた。「あし―に【脚荷】航海に適するよう相当の吃水をつくるため積み込む荷物。底荷。バラスト」と一回りしてバラストにたどり着いた。

インターネット等で見ると、現在の船舶は二重構造になっていて海水を出し入れすることで調整できるようだ。しかし、ここで扱うのは鎌倉時代からから江戸時代の木造船であり、海水による吃水の調整は不可能である。したがって、積荷による吃水調整を行って転覆の危険性を回避しようとしたのであろう。

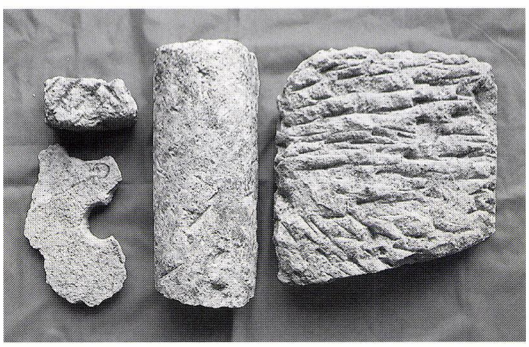
バラストに利用されたもの

前出の『広辞苑』によれば、砂・石・石炭・塊鉄などの重量品を積んだとあり、筆者は「…などの重量品」という表記に惹かれるものがあった。重量品であれば何でもいいのではないか、船に相当の吃水をつくればいいのだから材料（バラストの素材は）重量があれば良いということになる。言い換えれば、乱暴な言い方をすれば重ければ何でもいいということになる。そして、重いことに加えて体積が小さいもの、比重の大きな物体であれば、バラストが船倉に占める空間が小さくなり、軽い荷物が沢山積めることになる。

筆者は、昭和五二年上越市に勤務して以来、春日山城がフィールドである。当時、中世遺跡の調査は限られていて、北陸では福井県福井市にある朝倉氏の拠点、一乗谷朝倉氏遺跡の調査が始まったばかりであった。建物の写真は手元に残っていないが、「福井県立浅倉氏遺跡調査研究所」という看板は掲げられていたものの、その建物は今はもう見ることもなくなった青い屋根のプレハブの建物だった。古墳時代の土器で卒論を書き、中世陶器など門外漢の筆者は、春日山城の調査で出土した陶磁器を携えて年に何回か研究所に通わせていただいた。建物の記憶は今も消えることはない。当時の職員の方とは、今でも交流が続いている。

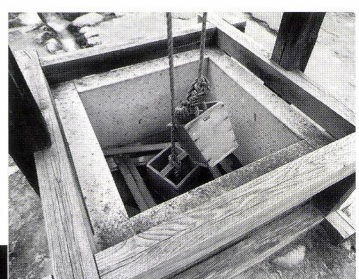
一乗谷に通うようになって、遺跡のあちこちに青っぽい石で、明らかに加工された板状のものや石仏が沢山見られることに気が付いた。研究所の小野さん（当時）にお聞きしたところ、福井市の足羽山（あすわやま）から産出する「笏谷石」、別名「越前（青）石」という石であることを教えていただいた。井戸の枠として使われていたのには大変驚いたことを昨日のように記憶している。

この記憶が、後に日本海の海上交通を考える時に大いに役立つことになる。

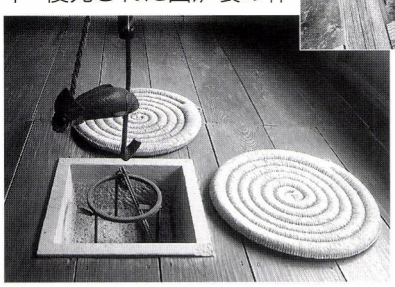


笏谷石
左上　福島城跡出土
左下　春日山城跡出土
中・右　高田城跡出土
（福島城から持ち込まれたか）

朝倉氏遺跡

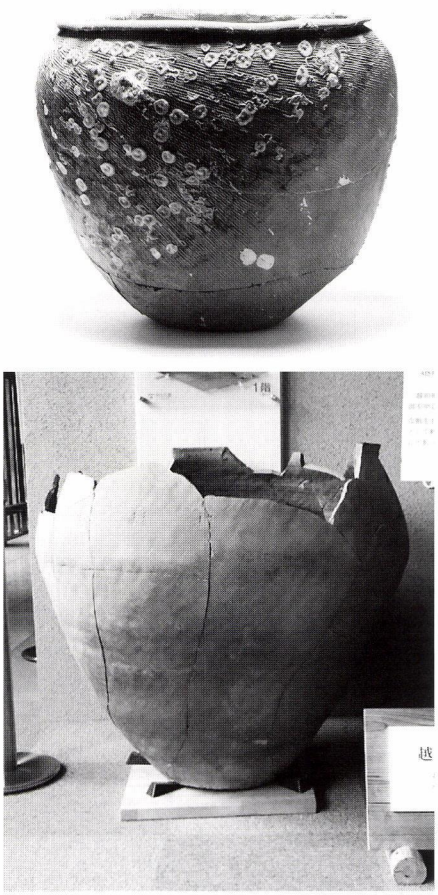


右　復元された井戸枠
下　復元された囲炉裏の枠



珠洲と越前

上越地方の中世遺跡を掘っていると、もれなく珠洲焼と越前焼が出土する。春日山城の調査を進めていた昭和五〇年代後半、珠洲焼がいつごろ使用されなくなるかということが話題となった。当時は短絡的に、生産地が衰退する一六世紀前半であろうと漠然と考えていた。ところが、春日山城で笏谷石製の石鉢が出土し、昭和五九年高田城跡（上教大付属中学校）で発掘調査を行った時、笏谷石の瓦が出土したことで、珠洲焼と笏谷石の関係が気になり始めた。何故かというと、春日山城の最盛期は一六世紀後半であり、珠洲焼の衰退期を過ぎた時期に当たるからで、筆者が知る限り春日山城の戦国期の遺構からは珠洲焼は基本的に出土していないのである。五智国分寺の宝篋印塔や十念寺の石仏に笏谷石で作られたものがあって上越でも見られることはわかっていたが、出土品として次々と目にするうちに、珠洲焼は製品として、商品としてだけの理由で持ち込まれたのではなく、船が航行するときに必要なバラストとして船積みされたと理解できたのだ。



上　名立沖から引き揚げられた珠洲焼の壺
　　フジツボが付着し「海上がり」だとわかる
下　越前焼大甕（上越市埋蔵文化財センター）
　　伝至徳寺跡出土

写真（上）は、名立沖から引き揚げられた珠洲焼である。海に沈んでいたことがよくわかるように、表面にフジツボが付いているものを載せた。一三世紀に焼かれたものと考えられ、堅牢な焼き上がりで、まさに商品と考えてよいものである。現在、上越市教育委員会の所蔵となっている。

では、珠洲焼の生産が衰退するのはいつごろかというと、一五世紀後半からと考えられているのである。一六世紀には擂鉢のみが焼かれ、軟質のものとなって消滅していった。この珠洲焼の変貌から、珠洲焼の消滅を内側（産地）の理由とする考えもあったが、春日山城や直江津の伝至徳寺の調査から、珠洲焼が大量消費される時期には笏谷石があまり見られず、越前焼が珠洲焼を凌駕するようになって、同じ越前から持ち込まれる笏谷石が目立つのではないかと考えれるようになった。

以上のことから、珠洲焼の衰退が生産地に内在する問題ではなく、越前焼や笏谷石が持ち込まれるようになる航海術の進歩に求めるべきであり、珠洲焼を商品として、またバラストとして一石二鳥の積荷として利用していた珠洲以北の日本海交易に、珠洲に寄港しないで、もっと

極端に言えば能登半島を未寄港で通過する船が航行し、珠洲焼と違って焼き締めの堅牢な越前焼に消費者の購買意欲が移り、珠洲焼が衰退する原因となったと考えるべきだと思うようになった。そして、越前焼とともに積み込まれたバラストが笏谷石であり、中世遺跡から出土するのであろう。

笏谷石の利用

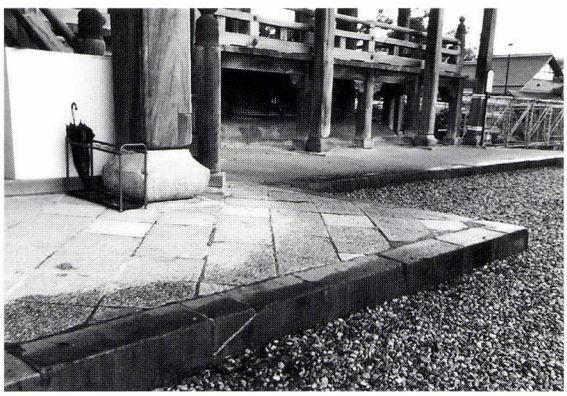
ここで、観光旅行などで訪れたことがあるであろう神社仏閣を誌上散策してみよう。

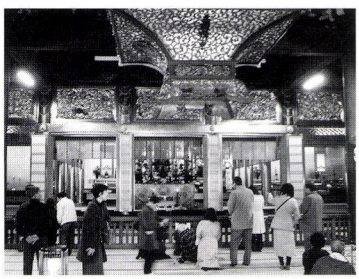
先ず、能登一宮気多大社を訪れてみよう。写真は今年の一一月に訪れた際のもので、拝殿（国指定重要文化財）の修理経過をパネルで紹介していたものである。右下に拝殿前の神門と石段が写る写真がある。この石段が笏谷石なのだ。そのほか気多大社にはまだまだ多くの笏谷石がある。気多大社に行けば、一〇分ほど足を延ばして妙成寺にも立ち寄るだろう。立派な五重塔のある日蓮宗の名刹である。ここには笏谷石で作られた石廟が数多くある。石廟といえば、高岡市の瑞龍寺の前田家の廟所が、やはり笏谷石で作られたものである。瑞龍寺はおいでになっても、建物の裏にひっそりとたたずむ廟所をご覧になることは少ないかもしれない。是非、一度ご覧いただきたいものである。

高岡市に移動したので、海沿いの伏木にある勝興寺にも寄ってみよう。写真は高岡市の杉山氏から提供していただいたものである。勝興寺は、現在大規模な修理工事中であるが、その本堂の規模たるや巨大なもので、高田寺町の浄興寺を見慣れた筆者もその大きさには脱帽であった。写真は勝興寺本堂の向拝の石敷きと縁石に使用されているものである。杉山氏によれば、「伏木は近世建築や石塔にと、どこでも使っていますよ」ということであった。杉山氏は輪島の文化財建造物や新湊など、多くの情報を寄せていただいた。



気多大社神門　石段は笏谷石





勝興寺
左は平成の大修理が成った本堂内



瑞龍寺石廟

一〇数年前、北海道江差町の旧中村家住宅を見学した。国の重要文化財の住宅は笏谷石の土台でできていて、笏谷石を追っかけていた筆者感激の一瞬であった。残念ながら写真を見つけることができず、本紙に掲載できなかった。とても残念でならない。言い訳にもならないが、中村家の流しで実証してきたことがあるので付記しよう。中村家の流しには越前焼の水瓶が置かれていた。水盤の右に置かれていたことから、水は右手に持った杓子で汲んでいたことが分かる。したがって移動しない水瓶なので、内面の底から胴の少し上がった部分だけが擦れていることが見て取れた。さらに水瓶の左側だけに擦れた部分があり、右手に持った杓子によって削られたことが分かる。上越に戻って出土品を検証した結果、杓子の当る左側だけが擦れているものが大半で、中村家のような使い方がなされていたことが分かった。実り多く楽しい見学会だった。山形県の酒田市には、笏谷石の階段もあるそうだが、実見していないので情報だけに止めたい。

と、ここまで筆を進めてきて誌上で訪れた地の笏谷石が、いずれも江戸時代のものであることに気付く。冒頭に記したように、江戸時代には全国に流通した商品であった。


五智国分寺の石畳


五智国分寺経蔵　土台石は笏谷石


笏谷石の宝篋印塔
五智国分寺境内（善光寺浜出土）

越後府中の笏谷石

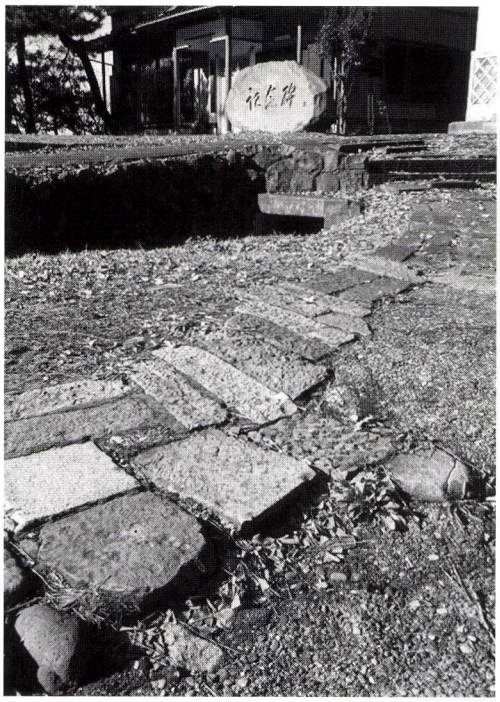
時代を中世にさかのぼって、五智国分寺に出かけよう。本堂から竹之内草庵あたりに、たくさんの笏谷石を見ることができる。これらはみな三〇㎝前後の四角に切られたもので、大きなものではない。気多大社や勝興寺のような切石というよりは極めてコンパクトなもので、ノミ跡が残っているのが特徴である（写真）。国分寺にはこのような笏谷石のインターロッキングのようなものから、切石のものも存在する。経蔵である。国分寺の経蔵は棟札の残っている建造物としては上越市最古のものである。江戸時代の元禄六（一六九三）年に建てられ、三二〇年余り災害に遭うことなく現在に至っている。

さて、国分寺の笏谷石は山門を境に激減する。加賀街道に面する石畳の縁石が笏谷石であるが、山門と街道までの間は使用されていない。

国分寺は永禄五（一五六二）年に上杉謙信によって再興されたもので、再興当時は御館の方向を向けて伽藍が構成されたと考えられている。しかし、高田城が築かれて加賀街道が造られたことによって、伽藍の向きも変更を余儀なくされた。街道から遥拝する場合でも、参道を歩いて本堂に参拝する場合であっても、伽藍の向きは南向きに変更する必要があったのだろう。伽藍の向きの変更時期は慶長一九（一六一四）年以降であろうが、越後府中の移動、そして直江津の変貌と無縁ではない。

出土品以外で笏谷石の多く見られるのは、寺町の天崇寺である。石塔から石畳まで、あちこちに点在する景観はおそらく市内随一のものであろう。市内にはまだまだあるし、筆者も全てを見ているとは思えないので、今後も調査を続けるつもりである。

なお、筆者の故郷能生の白山神社にも中世的な笏谷石がある。石畳の一角に置かれた石は、中世に建てられた本殿（国指定重要文化財）とともに、何百年も湊を見守っている。



能生白山神社の敷石

中世から近世へ

直江津は越後府中としての機能を終えた福島築城の慶長一二（一六〇七）年以降、大きく変貌したことは想像に難くない。越後随一の都市が農村や漁村へと姿を変えていったと考えられる。直江津駅の下には、関白近衛前嗣や管領細川政元らが訪れ中世越後の栄華を極めたとされる、越後守護上杉家の館、守護所と推定される遺跡が眠っている。守護所に近接して名刹至徳寺もあった。五智には御館を中心に館が点在し、戦国期の府中の中心であった。それらは府中機能が福島城へ移っていったと同時に、主を失い水田に畑に、そして民の家へと変わっていったと推測される。

このような景観の変化は土地の改変も伴い、これによって中世的な笏谷石は土に埋もれて見ることができなくなった。国分寺の美麗な石塔も出土品なのだ。中世的な笏谷石の仕様を思わせる国分寺の本堂周辺と、山門から加賀街道までの笏谷石のない空間、近世的な空間への変化がそれを教えてくれているのだ。公図を読み、地中の情報を探しながらも、黙して語らない土地とも対話していくこと、これが歴史を読み解く「鍵」だと考えている。

バラストに見る中世と近世

これまで述べてきたことを集約すると、以下のような考えに至る。

笏谷石は当初小さく切り分けられたものが、バラストとして船底に積まれてきた。国分寺本堂付近に見られるものなどがそれである。これはあくまでバラストであり、笏谷石という製品ではあったが、商品価値としてはどれ

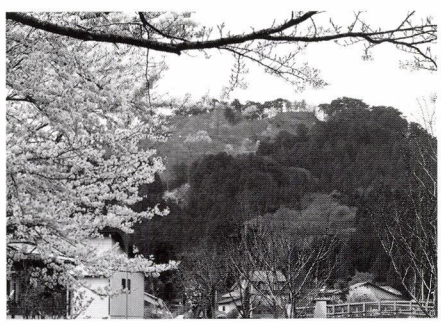
くらいのものだったのであろうか。もちろん製品もあった。国分寺の宝篋印塔はその代表例である。しかし、数は少ない。なぜならば、北上する船は能登の寄港地で珠洲焼にバラストの位置をとってかわられていたと考えられるからである。特別な商品、石塔のような笏谷石が持ち込まれたことと、珠洲焼とは別物だと考えた方が妥当である。

しかし、戦国期から近世の航海術の進歩は笏谷石を商品として流通させることとなったのではないか。北海道江差の中村家の土台がそうであるように、大阪へ物産を運んだ船が、帰りに三国で笏谷石を大量に積み込み、それを直行便で北海道まで運んで土台として使用したのではないかと考えた。

小型のバラストから商品としての笏谷石へ。これが航海術の進歩の証しであり、中世から近世への変貌と読み取ることも可能である。（上越市専門学芸員）

歴史は「今日（きょう）」への手紙

番外編



春日山城跡土砂崩落 あれから一年

〝四十年で一番悲しかった日〟（本誌三九号）と書いてから一年が過ぎた。工事も進み、現在は最終段階の表面緑化工事にかかっている。三九号でも書いたように、春日山城跡の土砂崩落は四〇〇年の星霜を経て風雨によって少しずつ流されていた土砂が、下方の傾斜の緩やかな場所にたまったことに起因していたことが明らかになっている。根本的な山崩れではなく、たまった土砂が大雨で水を含み、自重に耐えかねて滑り落ちてしまったのだった。しかし、そのはずみで一部の岩盤が引きずられたのも事実で、オーバーハングの状態が生まれる結果にもなった。

そこで、土木や中世城郭を専門とする研究者を招いて委員会を設け、春日山城らしく、そして城郭の景観を損なうことなく修復する工法を検討して、春から工事を進めてきた。もちろん、残った景観は工事によっても削らないで修復できればそれに越したことはないが、オーバーハングして迫り出した土砂は自重で落下することは明らかである。したがって、落下が容易に想定される土砂は最小限取り去り、崩落の拡大を防ぐように配慮されている。

工事は崩落危険個所を削り取ることから開始し、岩盤の補強工事、斜面の崩落防止工事へと進んだ。写真にある白いブツブツは、アンカーを打ち込んでパネルを止めた工事のアンカーの頭が出ているものである。もちろんこれでは史跡の景観としてはふさわしくないので、植物の種を混ぜ込んだ土と繊維を吹き付けて緑化を促すのである。植物の種子は、地元の小中学生をはじめ地元の皆さんのご協力を得て採取したものを吹き付けることになっている。来年になれば、今回の

工事で吹き付けた種子が発芽して緑化されていく。早く発芽することを祈るばかりだが、急傾斜ゆえに冬期間でどの程度流れるかは予測しにくい。来春は、また春日山に登る回数が増えそうである。

市民の皆様はじめ春日山を訪れていただく皆様に、一日も早く修復された春日山城をご覧いただけるよう、最終段階の工事を見守っている。

（上越市専門学芸員）



山肌が見えて痛々しい昨年の様子

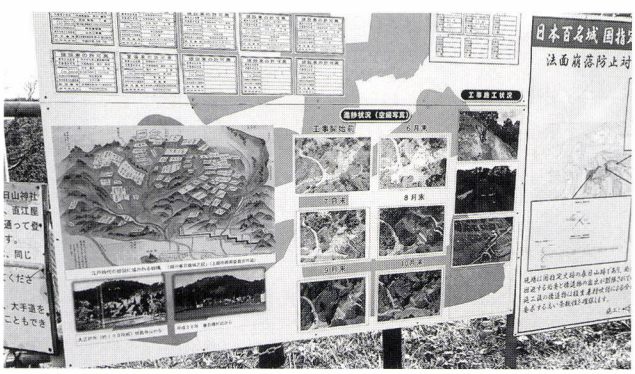


ロッククライミングマシーンという珍しい機械



緑化を待つ工事現場





工事の進み具合を紹介する看板（謙信公銅像南側の道路）

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後（かみえちご）全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

年を一つ取るごとに、考え方がネガティブ（後向き）にならないように注意しています。現状が厳しいと、さらに目線が下がり視野が狭くなっていく…、誰かが注意してくれるとありがたいものです。

今回、伊藤さんから〝地域への提言〟をいただきました。背筋を伸ばしポジティブ（前向き）に、長期的に考えてみようとの提案です。

「皆さん、大丈夫ですよ。当地には宝物がいっぱいあり、魅力をアピールし、手を拡げてお客様を迎えるよう頑張りましょう！」。（梅田）

目　次

特集　提言
長期的視点から
上越人に考えていただきたいこと　4
『おらが在所』　13
国府―春日山―府中―直江津の空間を駆ける
春日山城と越後府中　5
港町と笏谷石～商品だったバラスト
上越市専門学芸員小島幸雄　23
巻頭エッセイ・
記憶の底に生き続けるまち　鈴木のり子　2
歴史は「今日」への手紙　番外編
春日山城跡土砂崩落から一年　29

「直江の津」
第一四巻二号　通巻四一号
発行日／平成二九年十二月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信栄社
電話〇二五（五四五）〇二〇二
上越市中央二―八―一
制作協力・北越出版

2017・2号

直江の津

発行／平成二十九年十二月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五〇〇円